

◇◇信仰の歩みを進めるために◇◇

新刊 浄 土トラク

大正大学教授 佐 藤 賢 順 著

彼岸

会

K

憶

う

藤

吉

海

2

3

し絵・カット

表

紙

絵

加結

藤

城

天

童

浄

土

九

月

目

次

信 仰 へのみちび 定価十五円〒八円 日六版 ・ 十六頁

目

4. 3. 2. 1. 美的情感を超えて大慈悲の仏教 にて

> 7. 6. 5. べてを包む

人生は信ずる心か ままに か

百 部 以 上上上上 二五一五 割割割分 引引引引

二百部以

大正大学教授 竹中 信常著

仏

目

4. 3. 2. 1.

れゆくもの

に水を飲

ませる

6 0

5.

信ずること

門 定B 一個二十円〒1 八一頁

やみとまよいの でに救われている 8. 7. 6. 新しき生活 美わしき世界の 建設

釈尊

0

生涯

2

佐

藤

密

雄

35

屏

の御法語………

12

仏教ものしり帖

39

童心仏心………

17

会員だより.....

40

信行道場と弁康上人

中村さんの思い出

伊里真

藤見野

宏達正

天雄順

33 31 28

中村氏のこと ……

東京都品川区 上大崎一の七八二

法

振路 上 東京八二一八七番 仰

> 守 仕事する 経典解説 法然上人の感化……… 比 インド紀行 られているもの 村弁康追悼特集 叡 伝 にも南 吉 日 Ш 陀 無阿弥陀仏 記 0 順 地④ 0 0 村 右斎由 川藤 橋 上 藤 捨 良 賢 博 次 順 和 之俊郎 了 $\widehat{14}$ $\widehat{10}$ $\widehat{12}$ 6 24 22 5

真 理 の花た 若き女性への仏教入門 佐. 藤 良 18

九月土

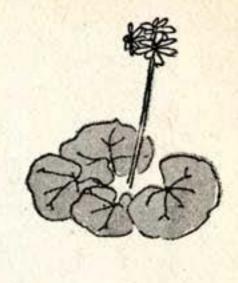
月号

の冠者、花洛に乱入のとき、た

だ一日聖教を見ざりき。

法然上人御法語





彼 岸

藤

花という名前のせいであろうか。いや、それだけではない 沙華のことを思う。葉よりも先に花だけが、 あの花には何かお浄土の花を連想させるものがある。彼岸 うと教えてくれた。そのせいか、あの花が咲くと、なくな 通った田舎道に咲いていたあの曼殊沙華のことが忘れられ ない。母はその時、 くしは九州の田舎に育ったが、子供の頃、母に連れられて て四季の移り変りの速かなるにおどろくことである。 ト出て、真赤に咲くと、ああもうお彼岸だなと思う。そし ようだ。あの花自体に、何かこの世ならぬものが感ぜられ った人のことを思い出さずにはいられない。そういえば、 お彼岸が近かずくと、田舎の墓地に咲いていた赤い曼殊 あの花のことを"精霊さん花"ともい 大地からヌッ わた

彼岸花とは違うようだ。法華経の序品には「是の時、天よ れは、鮮白柔軟な花であるらしい らして、仏の上及び諸天大衆に散ず」とある。それで、こ り曼陀羅華、摩訶曼陀羅華、曼殊沙華、摩訶曼殊沙華を雨 軟華・白円華・如意華・檻花などと訳されている。しか が、日本では特に異国の花という感がするからであろう。 く続かないせいであろうか。いや、原色に近いあの赤い色 るそうである。 というから、こんな柔軟鮮白な天 この花を雨ふらすと、これを見た る。これは、あの花が彼岸頃にパ 曼殊沙華といえば、梵語では これは天空からふってくる天華の一種で、日本でいう なるほど、花を愛する人に悪人はいない等 manjusaka といって、柔 華をみては、心も浄化さ ものは、自ら悪業を離れ 。そして、諸々の天人が ットと咲いて、あまり長

れて、自ら悪業を離れることにもなるであろう。

わたくしはインドのベナレス大学にいた頃、大学の構内 で日本の曼殊沙華と全く同様な花の咲いているのをみつけ は南国的な花で、その周期的な開花のたしかさを思うど、 永劫回帰の思想やインド人の劫波説等のことを思わずには かられない。

0

もう二〇年も前の話であるが、京都大学哲学科の卒業論文に「彼岸愛の世界」という論文を書いた学生があった。 その人の名前も忘れてしまったが、この題名に、わたくし知るよしもないが、当時、たむろしていた知恩院の継志学知るよしもないが、当時、たむろしていた知恩院の継志学が、当時の学友も戦争で多くなくなってしまった。人間のでが、当時の学友も戦争で多くなくなってしまった。人間のだが、当時の学友も戦争で多くなくなってしまった。人間のだが、当時の学友も戦争で多くなくなってしまった。人間のだった。

うか。 神の愛の手にすがって生きて行く O , H 大船に迷惑しながら、常にそのと ものになることはできないことで であって、此岸にそれをもたらす うな人が彼岸を信知することは容易なことではない。しか きえた人々である。 をして来た人々がある。それは常 ら彼岸への白道を歩みつづけた人 そうとは限らないと思う。現に愛 いうようなものが、人間に成就せ て彼岸を知らない人は、 おいてある生活こそ宗教生活とい ら彼岸的な生を生きた人々であり 念仏に心を洗われた人々であった 泥の中にあ 白蓮華に喩えられる念仏者の一群 であろうか。人間 のであろうか。神の愛とか、 われわれ人間は、いつまで 度び彼岸を信知すると、 ロスに対してアガペ的な愛 りながら、心は彼岸の の愛がその此岸 常に彼岸と此 宗教的に 仏の ح 盲目な人である。そのよ えるであろう。此岸にい 岸とが不即不離の関係に 浄土に遊ぶような生き方 である。との身は此岸の 々がある。それは泥中の とを懺悔しつつ、此岸か 欲の広海に沈没し名利 あろうか。私は必ずし 性をはなれて、彼岸的な より外に生き方はないの も仏の慈悲につつまれ、 ことはできぬものであろ は、あくまで彼岸のもの 慈悲とかいわれるところ られることはできないも の身は此岸にありなが に己が罪を懺悔して称名 時において永遠を、生 それは此岸にありなが

がら、 仰というものの構造であろう。 安らぎは、 ちらからは毁れぬ彼岸性の確かさをもっている。 たのである。 ていたという自覚に、 ことを指すも 信仰は 心 は彼岸 求めていた自己が却って実は彼岸から求 逆説 此岸にあって、どんなにとんでもはねても、 のである。 この に住することができる。わたくしの 0 やすらい」であるとい ことに気付いた時、 心の安らぎを覚える。 他力とは、実はこのような 求 2 た。 める者は求 そして、 彼岸 8 それが信 られて を求 友人 83 6 3 な は

此岸 浄土教の究極 である。 ぬ。彼岸が本来の家郷であって、彼岸へわれわれは帰る 士: から彼岸へという面 教などに 帰るということは、 は彼岸から此岸 お い T も、 0 みが強調されてきたが、 捨此往彼などと言って、 自己の本来の姿に戻ることで へということでなけれ 実は、 從来 ばなら 0 は

信仰 彼岸 ある。 還相 がいい ろう。 200 13 あると述べ とであって、 風に言 ンドの偉大なる仏教者であったが うよ 究 それ 廻 0 極 的生活をするというより外に つまでも、 て完全に宗 から此岸 これまでは到彼岸などとい は此岸 向 うなものと考えられては 究極は此岸における彼岸 わ は此岸にお 0 れ 問 てい て来た 彼岸が 題 か へ思って、 到達できない単 る。 教的 ら彼岸 の解決の が、 b いて彼岸を生きるとか、此岸にお な生活をすることの意 ここで此岸 池 本当は本来の家郷たる彼岸 秘訣は 生死の 生れ われ て後は、彼岸に止らず今度は 0 的 中にある人間を救うことで 家郷である。 K ならない。 なるイデーとか 生活の確立に おそらくことにあるであ 還るとは、結局は此岸に 、さすがに、 って、彼岸に到るという ありようがない。 浄土教における 仏教大学教授 味 世親菩薩 にほ ある。 極限概念と 彼は浄土教 に帰るこ か 淨土 い な は 5 て

因 再 考

をしようとし

の一方の拍車 う前 から大丈夫だよ」 進んで半分 0 たとえ拍車 7 力が後え残ることはな年は片方だけでも馬のた。その人は なの片

馬の遠野/ はつけないで出かけた すると途中で友人に出あっ そのことを見付けて、 脚だけ -付け、竹 た。 友 人は 他脚 早 速 諸 脚に こう答えて拍 が前 を必ず二つにしなくてはならぬというが二つ、靴が二つだからといって、す前の方へ進んでいった。

~ う す

ないじ

P

な

11

か

だろが 力的 程のことではなかろう。時には不可欠のととではなかろう。時には不可欠のとといって無理に根拠もなだったんだから、といって無理に根拠もなだったんだから、といって無理に根拠もなどのととではなかろう。時には不可欠のと 因い、 きもあ 0 10 て止め

日課念珠

大師の門徒中に、阿波介と云う者があった。 きわめて「性鈍」と云われて、門徒仲 ある時、大師上人は列坐の門弟達、特に おる時、大師上人は列坐の門弟達、特に

かの阿波介の申す念仏と、源空(大師) が申す念仏とでは、いずれが勝るや。 と、おたずねになったのである。 と、おたずねになったのである。 と、おたずねになったのである。 はあったが、その問をうけては、改めて念 仏の価値を治定しようとして、

介の申す念仏とでは比較になりません。

大師はそれを聞かれて、形を正してから されば日来浄土の法門とて、何事を学ば れたるか、かの阿波介も、仏たすけたま えと思いて、南無阿弥陀仏と申す。源空 も仏たすけたまえと思いて、南無阿弥陀 仏とこそ申します、更に何らの差別もあ る筈がない。

> と、仰せられたのである。 仏さまから見る時は、誰でも平等である いっている。浄土宗の大師の「よさ」は、 阿波介も源空も区別ないと云われたよう に、区別することなく、各人平等の立場に あることである。

者はなかったのであった。 骨目も、とうとく感涙にむせび、感激せぬ の一同も、今さらながら宗義の肝心

-

その阿波介は、百八の念殊を二箇持って 念珠は一箇でしかるべきなのに、二箇二 念珠は一箇でしかるべきなのに、二箇二 ある人が

なぜ、二箇の念珠を同時に用いるや は、 第子ひまなく、上下すれば、その緒つか がまなく、上下すれば、その緒つか

がれて切れないためですよ。 がれて切れ易い、一連で念仏を申し、一連 がれて切れ易い、一連で念仏を申し、一連 がれて切れるいためですよ。

かれると、答えたのであった。大師はその話をき

何でとも一心に心にかなった時には、よき知慧才覚が出るものである。彼は性鈍からこそ、かかる知識が生れ出た訳である。

と、ほめていられる。

Ξ

も、日課の誓約は、大切な宗の骨目の臼と なっている。大師在世中も同ようであった。 日課の誓約は、大切な宗の骨目の臼と があった。

らない。 但しそのかずをとる時には、数をとると

解決が出来たのである。この問題の解決

村上博了

比叡日記

STANDARD STA



佐藤賢順

れやが次ぎ次ぎに脳裏を往き来する。祖廟 とを考える。法然上人と関連したあれやこ した。 くの時間に、裏山の法然上人の御廟に参拝 雨が少ないそうだが、梅雨期らしく蒸し蒸 の前に佇んで、 きて、暑い。知恩院の夏安居に出講するた しする。 きの感懐は何ともいえない。いろいろなこ めに登嶺した。講義の始まるまでのしばら 六月二十六日 夏安居の講義は午前と午後に渉った。夕 独りでコツコツと御廟へ登っていくと いつものことながら、 雲の切れ目から強い日光が射して しばらく合掌唱念した。 京都は今年はカラ梅雨で 幾段もの

京大、 大学の恵谷教授その他の諸教授が歓迎会を 院側からは岸門主はじめ部長さん違、 ていた。わたくしは「現代思想と浄土数 講義を聴いて下さった老師も幾人か加わっ 談会という大役があったので、その斡旋役 6 席するために一日早く入洛して同席した。 開いて下さった。竹中教授も今夜の会に出 のその会合に出席した。集った人は仏大、 である藤吉慈海教授に促されて、信受院で にはもう一つ七時からの学生法然学会の座 仏教大学の諸教授の御厚意を深謝しなが 歓を交えていたのであるが、 竜大などの学生など多数で、昼間の わたくし

> いた。 が蚊帳の中で独 とで考えた。若い人達が共通に持っている 浄土教について こだわっていて 仏の現実的な意 った。 とは諸君の熱心 めには、 に落ちるのであ 十時近くなっ もっと強く かなり踏み 結局、 もっと踏み切る要があろう。 話題の中心は、 て白寿庵へ帰った。 の物足りなさを解決するた 話してもよかったかと、 込んで話したつもりである はこの問題は解 義との食い違いということ りでポッンと雑誌を読んで った。法語や宗学に余りに な質疑と意見との開陳にな 極楽往生と念 決でき 竹中氏

らしい夜明けである。快晴である。東山山麗めた。遠くで山鳩も鳴いている。東山山麗めた。遠くで山鳩も鳴いている。東山山麗

いた。 になる。 になったので、即座に「比叡山の とお尋ねになったので、即座に「比叡山の になったので、即座に「比叡山の がした。 それからしばらく葉上さんの話が えした。 それからしばらく葉上さんの話が

方、

講義が済んでから、華頂会館で、

知思

というようなテーマでしばらく話して、あ

み込んでおいた。

は比叡山行、しかも葉上阿闍梨訪問を、組

開通したのであるがこの道は楽しかった。 ら銀閣寺の裏を上って新に開かれたドライ ら銀閣寺の裏を上って新に開かれたドライ の銀閣寺の裏を上って新に開かれたドライ

わたくしは根本中堂で下りて、ケーブルの坂本駅から凡そ十五分ほどを下って、無動寺谷の明王堂に葉上師を訪れた。この道はかなりの下りであつて、帰りの上りが思はかなりの下りであつて、帰りの上りが思いやられる。不動明王を安置する明王堂はている所である。これも堂々たる伽藍である。玄関を訪れると、葉上師が今しも一人の回峰行者を送り出して、立っていたところであった。

学研究室の同僚教授として長い事一しょです。たきりだった。葉上師とは大正大学の哲来て学生に回鋒行の話をしてくれたとき会来に学生に回鋒行の話をしてくれたとき会会が完全の同僚教授として長い事一しょで

CONTRACTOR CONTRACTOR OF CONTR

Property of the Contraction of t

おって、戦争前の非常時体制下の頃は、同 共にして、寒中の座禅や農場の勤労に出か けたものである。

として、雨の日も風の日も、休みなしに回 集されたものであるから、この行がどんな 日間の断食断水不臥不眠の行があったり、 る場所が三百近くあるという。その間に九 る行である。一日の行程が七里半、参詣 谷々をお参りして歩く行で、百日を一単位 であるが、回鋒行は比叡山の由緒ある絳々 行であるかは、あれを見れば凡そわかるの 真から始めて、師の回峰行を主題として編 写真文庫の「比叡山」の一冊は、表紙の写 時々、ホトトギスやオオルリが遠くで静寂 聞えない仙境である。葉上師は数年前に千 を破って鳴きかわすほかは、全く物音一つ れる。湖の色が、刻々に移り変ってくる。 になりながら葉上師と数時間話し合った。 日回峰という困難な修行を成満した。岩波 わたくしはここで精進料理の昼食を御馳走 に琵琶湖と大津の市街を一望の下に収めら ここの座敷の眺めがすばらしい。はるか 寸

だ、 半坐·非行非坐 しまうのだとい 知人に会う都合上、早晩にまとめて行って 日を六時に分け で、この修行が 相応和尚 上師は建立とは はやや小高い所 ちの一つである 台の四修三昧の る。半行半坐三昧は、いうまでもなく、天 た。今は、千日 かに坐して心を運らして、歩くと同じ順序 はかかるそうで あるので、千日を成満するのには、七年位 のであろう。)で を唱える。これがやはり毎朝二時間半位は で峰々谷々を回 心回峰といって、明王堂にいるままで、静 して大行満と尊称されている。その後、 かかるそうである。これも干日間を成満 京都へ下って信者と結縁したりすることが といってい (建立 うことである。千日回峰、 て行う行であるが、信徒や 続けられている。元来は 大師)を記念して名ずけた たが、勿論、回峰行の始祖 人物を建立するという意味 に建てられた建立道場 。葉上師の力で、明王堂より という四つの修行方法のう 一つで、常行・常坐・半行 の半行半坐三昧の最中であ ある。葉上師はそれを行満 っては、一々参詣して真言 毎朝、二時半から七時

更に千日の運心回峰に加えると、

TO THE TELEVISION OF THE PERSON OF THE PERSO

ということである。 「丁度、今日で二千四百八十五日目だ。」

梨の心境はどうであろう。 るといわれるこの難行を果したこの大阿闍 徳川時代に一人あった以来、初めてであ

机の上に置かれていた数冊の週刊紙が、と 心境が後味よく味われているに相違ない。 うか自信というか、そういう快よく楽しい しかし難行を成し遂げたという安心感とい 「別になんでもないよ。」

くなったようである。 葉上師の成満以来、 回峰行者はかなり多 化し指導してもらいたい、と祈る気持であ

固いつながりを常に持っていて、俗界を浄

気がした。俗態と全く縁を絶つことなく、

の仙境と俗界とを僅かに結んでいるような

都へ下る行者が来るはずだから。」 回ってきた。京都へ下る前日には、その翌 というので、待っていると、やがて行者は 日の分まで回るので、二日分回って、 「もう少し待っていてみ給え。 あす、京 (但

> ばらくその行者と話をしていたが、修行そ くそんなふうに思えた。修行の邪魔になっ を辞した。 上の宿院へ連絡してもらって、やがてそこ し帰路は逆回りして)きたわけである。 のことがいかにも楽しそうであった。 てはどうかと思って、ここえは泊らず、山 (ゆけ)三昧ということがあるが、何とな

りするので疲れて、浄土院で伝教大師の御 葉上師が、「最近、二度行ったが、今は学 廟を参拝しただけで、宿院へ帰った。 えってきた。しかし山坂をはげしく上り下 に参拝したときの記憶がはっきりと蘇みが 藤密雄師、戦病死した赤尾光雄師と一しょ といっていた。かつて昭和十一年の春、佐 …あの辺は一番、鳥が多い所のようだね。」 生が留守しているだけで、住職はいない。 然上人が十八才より三十四才まで研学修行 した所)まで参拝するつもりで出かけた。 まだ時間も早いので、元黒谷の青竜寺(法

ヨタカが鳴いている。まだまっ暗である。 六月二十八日赤尾君の夢を見た。遠くで

が、間もなく皇円を戒師として剃髪、 うす明るくなると、ツッドリが鳴き始め にあると聞いて、 ホトトギスが窓近くきて鳴いた。

ら逃げてしまったら、恐らくはこのお堂も うと茂って昼なお暗いほどであったのが、 ということである。今ではむしろ景勝の地 湖水がよく見えるようになってしまった、 開かれて、こん 台風で樹が倒お **登湖がかなり広い範囲に渉って、眺められ** 薪の代りに打ちこわされて燃やされてしま 争中、このお堂を守り通した、もしここか に昭和十八年に住むようになってから、戦 下る旧道に沿うて十坪ほどの仮堂がある。 した。そこが東塔の法然堂である。坂本 るけれども、戦争前までは、樹木がうっそ いろと話をしてくれた。広島の生れでこと とこを訪れると、 人ははじめ持宝房源光の室に入ったのだ ったであろう、などと。今、ここからは琵 遺跡が、この宿院を三丁ほど下ったところ 法然上人が皇円阿闍梨から得度を受けた され、 なに樹木は疎らになって、 老婦人が出てきて、 けさはそこを訪れた。 進駐軍に道路を切り いろ

といっていい位である。今、十坪ほどのおして、五十万円の予算で工事が進められてして、五十万円の予算で工事が進められてる。こうした遺跡は、志ある人の協力による。こうした遺跡は、志ある人の協力による。こうした遺跡は、志ある人の協力による。こうした遺跡は、志ある人の協力による。こうした遺跡は、志ある人の協力による。

が、二代目の慈覚大師が密教を中心にした 実際に宗教となるというようなことは、あ くして事実に即した事相の仏教、密教であ 仏教ではなくして、ほとんど密教であると ということも、うなずかれるのである。天 きことで、ただ理論的に高遠な天台教学が る、ということである。これはそうあるべ 三大部のような形而上学ばかりでなく、こ 台から浄土が出てきたことを考える上でも のむつかしい思想で宗旨を形成していった 華経中心であり、三大部のような天台大師 りえないことなのであろう。伝教大師は法 いうことである。天台教学の形而上学でな を参拝した。そして感じたことは、比叡山 の仏教がむつかしい三諦円融や一応三観の それから文珠棲や根本中堂などあちこち

考える必要があるであろう。

点工点三点、電気が明か明かとつき出した のタワーの何階かにある屋外ビアボールで のタワーの何階かにある屋外ビアボールで を眺めるのが好きで、時間があるとここへ を眺めるのが好きで、時間があるとここへ ると驚いたことには、四明岳の頂上に、一 ると驚いたことには、四明岳の頂上に、一 ると驚いたことには、四明岳の頂上に、一

蟬の脱がら

ある人、玄関に立って案内をこうのに、なかなか家人が出てこなかった。その内二才位の幼児が現われたので、「坊や、おかあちゃんは……」「かあちゃんはネ、いま僕をねかしつけている。……」

であるから、よほど強力な灯火であるに違であるから、よほど強力な灯火であるう。千年前の比叡山のことばかり考えていたわたくしには、全く思いもよらぬ出来事であったのである。

大正大学教授)

Exercise conservation de la cons

ある。

インド紀行(5)

仏陀の地

-ブッダ・ガヤー

斎 藤 昭 俊

純野菜食の朝食を御馳走になり、彼の自動車

で、その父、弟、息子達が案内になってブッダ・ガヤに向う。途中の道は立派な 哲路樹が大きな技を繁らしている。 古い道路には広葉樹の立派な並木が立てられているのはムガル朝の王達 が暑いインドの気候を考慮して道の が暑いインドの気候を考慮して道の た樹が路を覆うようにして繁っていた樹が路を覆うようにして繁っていた樹が路を覆うようにして繁っていた樹が路を覆うようにして繁っていた樹が路を覆うようにして繁っていた樹が路を覆っようにして繁っていた樹が路を覆っようにして繁っていた樹が路を覆っようにして繁っていた樹が路を覆っようにして繁っていた樹が路を覆っようにして繁っているが、辺りには木は殆んどなく岩の 「写真

塔のあとが残されている。この太塔も非常に である。この大 という。現在のものは四人で抱える程のもの 切り倒されたが、 剛宝座がある。 る。大塔の後に で仏陀となられた。この菩提樹は何回となく た石の欄楯で囲まれている。その円形の模様 る。この大塔は周囲が阿育王によって作られ の中に一つ一つ ッダ・ガヤに つく。遠くからあの大塔が見え 塔と宝座を囲んで沢山の供養 菩提樹があって、その下に金 違った動物が彫り出されてい ここが仏陀成道の地で、ここ 同じ場所に生え出したのだ



る油の匂いと石室特有の薄暗さの中にある。 た坐像で金色にぬられていて、周りは灯明にたかれの像、大塔の正面にあるこの像は大地に右手をつけの像、大塔の正面にあるこの像は大地に右手をつけ

冷凍工場をもつタンクさんを訪ね、彼の家で

ている。ガヤから南へ七マイルでブ

肌の見える丘と赤い土ばかりが続い

ス大学のアトレヤ博士の紹介状があったので

のって、六時半ガヤにつく。ガヤではベナレ

ス発一時二十七分の急行デリー・シアルダに

・ホテルを夜中の十二時半に発って、ベナレ

に大修理が行われた由である。丁度ブッダ・ジャヤンティでチベットから沢山の人達がやって来ていた。チベット人は自分達の一切の財産を整理して、はるばる仏跡参拝にやってくる。勿論インドに達するまでは幾十日も山を越えて歩いてくるわけだが、極めて素朴というか、野蕎さをもって、感情をむき出しにする傾向がある。子供達が乞食のまねをしてはなかった。河のほとりにそい、その昔を偲びながら帰路についた。

古く、何回となく修理されたが、一八八〇年

訪れ十二時半頃タンクさんの家に帰りつく。

ここで中食をとり更についでだというので、

本であった。インドでもカシミールは雪が降るが、私のいた北インドでもカシミールは雪が降度で通ってしまう。でも夜は少々冷えてくる度で通ってしまう。でも夜は少々冷えてくる時間である。この冬にインドネシア人の留学生期である。この冬にインドネシア人の留学生力がという町の友人の家に招待された。インドルという町の友人の家に招待されー晩泊ってダルミア(インドの財閥)の食油世界第二と云われるドーム造りのスルタンの世界第二と云われるドーム造りのスルタンの

墓を見て、帰りに彼の云うよう、折角とこまで出て来たのだからガヤまで連れて行ってくれまいかというので、再度、ガヤのタンクさんの家を訪問、その夜泊まって、翌朝早くブッタ・ガヤを訪れた。朝まだ早く冷えた夜気をそのまま肌に受けながら、ブッダ・ガヤにをさらって来ていたし、又頼まれてもいたのでもらって来ていたし、又頼まれてもいたのでは片を譲ってくれと交渉したのだが駄目だった。ブッダ・ガヤの博物館、チベット寺等を



【写真説明】 ブッダ・ガヤの大塔の近くの池から眺めたもの、こうしたタンクはヒンドユーの寺院にもつきもので、寺参りに身を清めるのと、お風呂の代りになる実有的意味もある、この写真にも少しそうした人が見える。

ものである。

便であった。 いうのはお客がそこで眠るためにあるような ていうことも普通なので、インドの待合室と れている。汽車は本数も少いし、真夜中なん 教国であるビ が建てられているが、他の国々の人々には不 泊まれるホテ ダ・ガヤへの 々為にはそれ ホテルが造られたが、それ前までは外国人が ガヤには仏陀二 ラージギリ、ナ インド人はそういうことには慣 参拝客のためにステーション・ ぞれ仏跡参拝のレスト・ハウス ルというのはなかった。勿論仏 ルマン又中国、セイロン等の人 ーランダへ行ったのであった。 一千五百年祭を記念して、ブッ

勿論金があればそれこそ何処でも大名旅行 は出来るのだが、一般のインド人はそれぞれ は駅のプラットホームで寝ながら旅行をす る。ガヤはヒンドユー教の聖地の一つでもあ るので、ここに巡礼に来る者達は全国から集 るわけだが、こうした信仰に生きる人達が集 ってくるのもガヤの特色である。

近代高僧伝

吉川大順伝

風光明媚なる瀬戸の内海を前に渉々たる眺 当時完 型絶佳なる播磨灘を控える処、ここ播州明石 らる。 の里は、彼の有名なる万葉の歌人柿本人鷹大 後間 が戒誉大順上人は土地の素封家吉川清兵衛の 尾山海 が成誉大順上人は土地の素封家吉川清兵衛の 尾山海 が現巻大順上人は土地の素封家吉川清兵衛の 尾山海 が成巻大順上人は土地の素封家吉川清兵衛の 尾山海 が成巻大順上人は土地の素封家吉川清兵衛の 尾山海

念仏行者の伝燈を踏む名家であった。

> | ・少教正と順次昇任補 ・少教正と順次昇任補 ・少教正と順次昇任補

後明治十三年七月廿八日櫨林佐太来迎寺に 転薫せられ、同十六年四月十六日引退播州勝 と山徳本寺二階堂に出棲、自他学の学侶を教 と山徳本寺二階堂に出棲、自他学の学侶を教 をし毎月一回講莚に下向せられ、其の間宗務 所より管長の名を以て司教・大僧正に補せら の世らる。偶々当時孝誉現有上人と知合い特 に刎頸金闡の交を成られ、一時知恩院の第七 十九世後薫を継ぐに際し、お互に謙譲の美徳 を以て譲られ現有上人は遂に知恩院の第七 を以て譲られ現有上人は遂に知恩院の第七

時に何かと相談相手として好伴侶と成られ

扉の御法語

義·大講義·権少教正

その間、少講義・中講

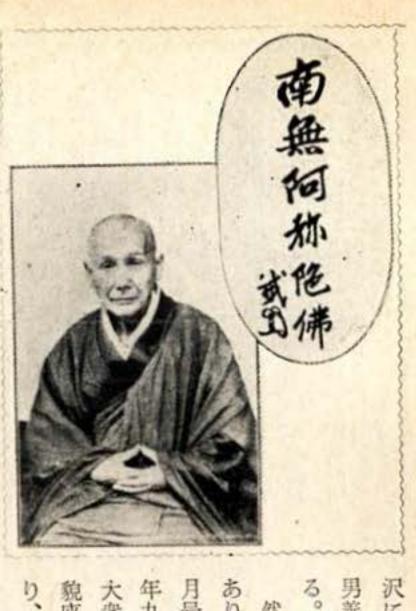
西光院に就住せらる。

→ との御法語を拝見しても、思者は思る童子の如く、是非も知らざる無智の者をしてとか、凡夫のためのお教いといった。との御法語を拝見しても、思者は思ったのでさか、というなお詞が随所に出ています。との位ですからざる無智の者は思います。との他ですからざる無智の者は思います。

そ上人の 62 に無理せず 誰もが心安 されなかっ ます。 ますし、 また上人は、 御 風格でありました。 く接することができたことこ 痴の者どもを決して捨てず、 往生のできる道を教えられて た者たちまで敬化遊ばされて つねに自然のままの姿で、 遊女や盗賊 の人間扱 いを

そのために反って上人の大学者としての一面、上人の並々ならぬ御勉学、御猛の一面にまともにふれることが少なく、上人のお教えを頂いて、安易に凡人に生してしまう弊がないでもありません。しかし申すまでもなく、上人の対象をでした。

にみち、多聞広学のきこえ世にあまねし。同じ巻に「上人智恵第一のほまれちまたこの御法語は勅修御伝巻五にあります



沢に浴する者多数あり、以て都鄙の善 男善女皆一同挙って讃仰帰依するに到

年九月廿三日午後四時、同院本堂裏に 月号参照)に凡てを任せられ、大正十 あり、後に法嗣宮田鳳瑞上人(本誌三 り、香煙殊々と薫ずる中に高唱御十念 貌座に安座合掌の上、念珠をつまぐ 大衆を集め一条の訓戒を与へ、只一人 を唱え、鑑然安祥として入寂遷化せら 然るに大正八年頃より幾分老衰の兆

る。同月廿五日夜半入棺の上、同院裏山に埋

共に砕励互助して常に宗乗の為めに精進努力

せらるる事実に大なり。

に当り、

八川卯之助及び田中宗兵恵の三氏が発起寄心 会は追日盛大に向い信者も逐次増加参集し上 明治三十六年頃より十善会を開莚せらるる 上人を開山として迎える。この十善 北播茨木在の東村に紫金山麗光院を 其の篤信徒中の大阪豊田宇左衛門・ は又宜なりと云うべし。終りに上人の鳳算正 隆碩・神谷随厳等幾多の名僧俟英を出したる 雲尊者と讃ず、上人の学徳見識を案ずるに正 に亨年九十歳其の法名は しく近世の学僧として唯一の人ならん。 世人異口同音に今釈迦と歎じ、 尚上人の門下より田中孝順・富田鳳瑞・林 又大正の慈

建立し、

人の法莚に繋がる。

により、

と諱らる。 善蓮社戒營上人性阿無作大順大和尚

ら十善会の講莚に臨み給い、信徒等の教化

爾来多年大阪を中心として各寺院に巡錫専

努められ、上人の徳益々燦然と輝き又其の恩

を惜て、 学よろしくそのあとをまなぶべきにや」 おほよそ我朝にわたれ 襟を正さないわ 御法語に続いて したその日 に申された御 うことなし」とあ けにはゆきません。 外は他事なかりけり。 日だけ聖教を見なか 「後には念仏の 木曽義仲が る聖教伝記眼 に接し、 ります。 京 いとま 誰 この もかた 2 IC K あ

と選述者舜昌が注意しています。 います。ある時、上人が月輸 質ねました。 また同じ巻五 某山僧に逢 にとっけいな話が 13 ました。 th 僧 殿 におら が上人に のって れ

その根拠を何によりましたか」 て催か一文だけですまされているので 上人が浄土宗をお立てになったの 宗義をお立てになる程のことに、どう 導の疏の附属の文です」 は、

上人が何も申されなかったのは、 て何も申されませんでした。 すると上人は 問 微笑されただけで、 をしたからです。 余りに 重ね

X

華

経典解説五

電場(約一五〇 典の後方にある十地品と最後の入法界品は 各々 典を四十六も数えておられます様に各品 十地品の釈(十地経論) りません。その後世親(約三二〇)は、 す。 真意をお伝えするのは大変難かしい 道先生の学位論文には、 もこの経典が、 儘のものである訳はありませんが、この に大部の経典ですので、 のではなかっ 華厳経と一口に言いますが、 勿論この大部 一つの経典として挙げられる程なの 大方広仏華厳経と申しまして、 た事が察せられます。大野法 もともとこんなに大きなも 以前に出来たには相違あ の経典が釈尊の説かれた を作っているので ここで簡単にその この華厳経系の経 この経は正 ことで 非常 この 0 から

す。

十九品を将来し、

法蔵が筆をとって訳出し

設に経 干関 あります。 ました。そしてついに東晋安帝の時に仏駄 を訳出しまして、爾後種々の部分が訳され 時、支婁迦識が名行品の別行である兜沙経 訳を完成したのです。 (四二八)その後法蔵 十三年に竺法蘭が十地断結経というのを訳 古く中国に伝来して飜訳されました。 来されたのですが、 巻華厳経 りませんが、その後約八十年、 したと言われています。これは現存してお 賢首大師)が欠文を補って現在ある六十 扨て仏教は中国に伝わって後、 の実叉難陀が華厳経梵本四万五千頌三 (覚賢) が全訳三十四品六十巻の (晋訳・旧訳)が出来上ったので (六四三) 更に唐の則天武后 中でも華厳経は極めて 後漢桓帝の 日本に将 永平 の時 飜

> たもの なり、 たのであります。 訳して四十巻にした四十華厳と呼ばれるも 百年ばかり経 十巻になっております。 (六九九)それから るといって華厳宗という宗派を生むことと の研究によっ れらの経典の飜訳は、中国の数多くの大徳 仏華厳経普賢行願品といっております。こ 十大願を説くところがあり、これを大方広 のがあって、 人般若が別 数うるに余りある研究書が続々と出 (唐訳 0 て、これこそ所依とするに足 梵本により入法界品の一品を これには前二訳にない普賢の って徳宗の時、カシミールの ・新訳)があって、これは八

華厳経の名が日本の書物に出て来るのは 続日本書紀に元正天皇養老六年(七二二) に元明天皇追福の為に八十華厳を書写した 事が書かれているのでありますが、これは 大寺の凝念によりますと、華厳経疏が聖武 大和総国分寺が天平二十一年に成っている といわれますから、当時華厳宗は大した勢 といわれますから、当時華厳宗は大した勢

典なのでどざいます。 典なのでどざいます。 典なのでどざいます。 典なのでどざいます。

0

会衛国の覚城に長者の家がありました。 とです。その功徳の為か、釈尊なき後の をとです。その功徳の為か、釈尊なき後の をとです。その功徳の為か、釈尊なき後の を選益々盛んでありました。この様な時、 をこの婦人は六牙の白象を夢みて受胎した。 をこの婦人は六牙の白象を夢みて受胎した。 をこの婦人は六牙の白象を夢みて受胎した。 をこの婦人は六牙の白象を夢みて受胎した。 をあります。それからの生活は以前に増

> 付けたのであります。善財は幼い頃から人 意清くして菩薩のないだら 常に清浄を願い、善知識に近づき、身口 婦人は月満ちて、一族歓喜のうちに玉の様 並はずれて智慧があり、他の子供とは違っ た。そこで相師はこの子に善財という名を くで、菩薩の行を具えている。」との事でし は過去に諸仏を供養し、深く善 根を重ね 占相に卓越した婆羅門が早速招かれて、こ な男の子を産みおとしたのでございます。 め、諸仏の法を修し、心の清きこと空の如 の男子の行く末を観て言うには「此の童子 長者の喜びは格別でした。当時城中で最も ていました。 薩の道を修し、一切智を求 よいおこな

被は覚城の東にある荘厳幢沙羅林という なここには古い大きな塔が建っていて、その とこには古い大きな塔が建っていて、その なまでの話)の絵が彫りつけてあるので す。それは風雨の為に相当剝げてしまって す。それは風雨の為に相当剝げてしまって の行をされたありさまや、雪山童子が一句 の法門を得る為にその身を悪鬼に捧げてい

> られました。 来ました。そんなある日、自分の捧げた花 花を片手に持っては大塔を礼拝しにやって 多太子から譲り受ける絵や、数々の本生譚 感じるところあって、いつも心は明るかっ が彫りつけてあったのです。善財童子はそ われて音楽の様な美しいお声でこうおおせ たのであります。来る日も来る日も善財は の一つ一つを眺めては考えにふけり、心に ところや、須達長者が祇園精舎を建ててそ る法を説いてあげよう。まず諸仏の正しい の中から、真白な象に乗った文殊菩薩が表 の敷地に一面黄金を敷きつめてその地を抵 る姿や、又は釈尊が竜王をお助けしている 人々をすくう法を教えよう。」 「わたしはおまえの為に妙な

法を理解し、人々をすくう法を教えよう。と。善財童子は自分が諸悪に満ちた社会に住み、自分自身もまた高慢、愚痴、貧染、自分でこれを解脱としても自分の力ではとても不可能であるばかりか、こうしているを作っている事を思い、そして、他の人々を作っている事を思い、そして、他の人々を作っている事を思い、そして、他の人々をあるまたそういう事になやみ、そういう事をもまたそういう事になやみ、そういう事をあるまたそういう事になやみ、そういう事をあるまたそういう事になやみ、そういう事をあるまたそういう事になやみ、そういう事をあるまたそういう事になやみ、そういう事をあるまたそういう事になやみ、そういう事をあるまたそういう事になやみ、そういう事をあるまたという事になる。

知らない人さえいるという事を考え深く悲知らない人さえいるという事を考え深く悲

文殊菩薩は善財のまじめな姿を見て、「感 心じゃ、よくぞその気になった。これから 南方に善知識がおられる。それらの方々に お逢いして菩薩行を修しなさい。」といって まずどんな問題についておたずねしたら良 で、その教えの通り南方を指して住みなれ た覚城をあとにしたのであります。

0

ての様にして善財童子は南方を指して、 一人一人五十四の善知識をたずねて華厳の 一人一人五十四の善知識をたずねて華厳の は一つ皆様に申しておかねばならぬ事がご さいます。それは大抵この様な物語をお話 のみが頭に残って、やれ花から文殊が出る のみが頭に残って、やれ花から文殊が出る されます。こう言う言葉を聞く時私は意外 されます。こう言う言葉を聞く時私は意外

> 言える事です。仏教は奇蹟や幻想を説くの ればそこからあなた自身にぶつかって来る が寝っているのです。それを起すのはあな に入れるのではなしに深く掘り下げて自分 ましょう。ただ話された言葉をそのまま頭 とする手段(方便)なのです。ですからそ 経の文学的結構であり、ある事を教えよう ら文殊が出ようとは思いませんが、これは たの心次第なのです。 ではありません。その中にはつきせぬ真理 のものにすべきです。これは総ての経 何かしら意義あるものを体得されるであり う少し考えて戴き、その言葉が意味する真 です。、釈尊はお生れになって七歩あるいた くものが善財であろうとなかろうと良い訳 れを教える者が文殊であろうと、それを聞 理をしっかりと受け取って下さい。そうす のは不都合だなどとおっしゃる方々よ。も ですし、善財は別に旅をしなくても良い 典に 0

この様に小乗仏者や一般の俗人が何故に善善知識とは比丘・長者・仙人・童女・医者善知識とは比丘・長者・仙人・童女・医者

です。即ち正覚者の覚った内容を菩薩を来 された直下の光景を賛歎して書かれたから 界(蓮華蔵世界)を賛歎する形式を取ってい 言……」とは 故にどの経典 的無限ということであります。凡そ経典は 出す無限で 宇宙の総て(真理)が指導者たり得るという るのです。と 所説経)ので を種々な面から表現している訳です。それ うことは言う迄もありませんが、その正覚 総て釈尊の正 た訳ではなく っているので て仏様が御説教される形式(所説経)にな ん。時間的無 いう事で表わすのが至当です。これも現在 修行をする訳 事です。更に これは華厳精神の一つ(一即一切)であり、 の数学的(8) 知識として指 あっても良いのです。要は精神 と一致するものではありませ も「如是我聞……」と説え 覚に基かないものはないと言 ですが、これは五十四と限っ ありますが、華厳経には「仏 限であっても、瞬間の中に見 いうのはこの経は釈尊が成道 あります。他の菩薩が仏の世 その精神的内容は 導することが出来ましょう。 何処にも書かれていない この物語としては五十四段の 「無限」と

味が難し過ぎて理解されなかったので、仏

勝ちなのです。

しかし教化とは、

与える側

んので、とかく魅力がないように考えられ

はそれらの人々がわかる様にやさしい言葉

(阿含経)で説き始め、徐々に高度な精神

厳経が説かれたけれども、 言いますれば、釈尊が成道された直下、華 と説明しておられます。これを俗な言葉で 他の経は色々な種類 ましょう。 格を異にした独特のものである事がわ 成道の根本となる経 ます。それに対して他の経典は仏の正覚に めぐらして教えた経 の様に言つて来ますと、 か(教化説法)という立場にあります。 基いて、 むしろ正覚の偉大さを賛じているのであり 内容は正覚の意味を説明しようとするより 迎して語らしめているのであります。 我々人生に如何に意義あらしめる この事を法蔵は、華厳経 の人を済う為に方便を (逐機の末教)である (称性の本教)であり 華厳経は他経と性 人々にはその意 は釈尊 その かり

が仏の正覚の偉大性を賛歎しているのです て華厳経は前に申しました様に、 台五

時教判)というのであります。

と同程度の経(法華経)を説くに至った

天

そこに自ら自分もこう在りたい、

自分は、

2.

うすべきだという心の動きが生れて来ると

された状態だと言えるでしょう。

思います。

その心の動きこそ、

教化が満足

を吹込んで行って、

最後に高度の華厳精神

5

仏の偉大性を種々な面から眺めた時、

構えがむしろ重要なものと考えられますか

からの力のみでなくて、与えられる側の心

(童) (心) (仏) (心)

よ

毎晩のことなんだから。」 お前 金魚 度のサマー の子が って子は、 スクールへも行きません。 本当に仕方がない 晩おねし よをし ます。 ね。

遊びに行く めます。かわいそうに金魚の子は、悲し そうな目をして、 エンゼル 支度をしながら、 フィッシュのおかあさん 水草を見つめているだ 子どもを眺 が

(鯉さんだって、 出目金さんだって、 小

> に……どうし 目高さん だって、おねしょしないの て私だけが。」

色です。 誰に なってしまっ 47 金魚の子は もいえな つも朝目をさますと『しまった』と て、毎日が冬空のように灰 劣等感で胸がいっぱい。 はずかしさのとりこに

りい て表われ を求める心が もありません ゼルフィッシ どうしてで 母親の愛情 きれい ます。 てい な着物を着て、出歩いてばか なんか、あぶくのかけら程 るのでしょうか。 ュのおかあさんは、毎日毎 しょう。そういえば、エン 悲しい心が、母親の愛情

から、私達への教化と言う面が見られませ 説 す。 説いたもので 経はその内容 ているのであ は偉大性、 べき重要な所 ちなみに いたもの 7 依となると思うのでございま を祥細に亘って深く追求さる ります。こう言う点からこの 粋性をポイントとして説かれ ありますのに並んで、この経 あり、法華経はその真実性を 量寿経は釈尊正覚の生命性を

(石川孝之)

眞 理の花たば

――若き女性への仏教入門 (六)ー

心ゆたかなるもの

濁流に生き抜き、こころの貧しさに耐えて生き抜く力はな れ、人の世の旅に今日もあえぐ。人ゆえにはかない。世の いのか。 ところ貧しいのであろうか。人の世に生れ、人の世にまみ 永遠のみ命のなかにあって、なにゆえにかくも寂しく、

苦しきもののともしび

貧しきもののともしび

わびしき者のともしび

世のともしび

永遠のことろの、ともしび

こころの、ともしび

われのこころの蔵のなかにないのか。真理の蔵のなか こころ豊かに、明るく、耐え忍んで生き抜く力は、われ にな

ぶつ世尊が、

いのか。

最愛の妻と子を離れて、求められたものはなにか。 約束された王者の地位をすて、

時をこえ ところを超え

男の子に

をみなに

行く道を耐える力と

佐 藤

良

生き拔く力とをしび

ぶつ、世尊は求められた。

ふつ、世尊は、 真理の蔵から生れました

ともしびを求められた。

ぶつ、世尊によってともされた。さとりのともしびは

真理のともしびは点ぜられた。

永刧に消えはしない。

消えはしない

世尊は仰せられた。 流れのなかに流れ入るのだ。 との燈火がこころに点ぜられた時、人は永遠のいのちの

自身理(法)のともしびをともせ 他のともしびによるなかれ、・

6

とによって、無数のぼんのうと呼ぶ、こころに燈火をもやすこかき消されるのだ。わびしさ、まづしさの根源はこの迷いなのだ。心の奥底にむすぼれてこころ本来の清浄なものを本来の自由さが得られるのだ。

絶対自由の境地が得られるのだ。この自由を得れば、自らこころ豊かに、解脱と呼ばれる、

燃やせ

燃やせ

こころのともしび。 あこがれの

自由の境地。

世尊が自らの燈火と言われたのは、この自由のともしび

なのだ。

をもしび。げだつ(解脱)のともしび。 がこころのともしびとなって、われわれのこころに輝く。 がこころのともしびとなって、われわれのこころに輝く。

をかかげよう。若人よ。ところの扉を開こう。そこにともしびの荷い手だ。光り水めに、求めよう。いのちをかけて求めよう。人の一生は水のがけよう。若人よ。

世尊の御理想をわたしは、ここに高くかかげよう。ともしびは輝くのだ。真理のともしびに照らしだされた、ともしびはない。真理のともしびに照らしだされた、自ら真理のともしびはいいでは、そのまま真理のともしびにつなが

いのままに伸びよ。地上のいきとしいけるもの、みな、そのところを得て、思

(じょうじゅ・しゅじょう) これがその一つの御理想だ。

悲願があろうか。世尊はそれをこそ願われたのだ。仏教の悲願なのだ。生かされて生きるわれらにこのほかにり伸びよ。こころゆたかに伸びよ。自由に伸びよ。これがお人よ。伸びよ。伸びよ。すくすくと伸びよ。力のかぎ

住合せにこころ明るくのびよ。寂しさにあって寂しさに ととを恐れてはならない。つまづいたら起きあがって、そ してまた伸びよ。それが永遠のみ命ちの意志だ。いきとし いけるものが、生き生きと、その与えられたいのちに、生 が、ひたすらに、求め、歩み、そして、伸びよ。つまづく ととを恐れてはならない。つまづいたら起きあがって、そ ととを恐れてはならない。つまづいたら起きあがって、そ ととを恐れてはならない。つまづいたら起きあがって、そ

他の一つの悲願とは、御理想とはなにか。

浄きみ仏のみ国をけがすことなく、 清めに清めよ

(じょうぶっこくど)

遠くひらけたうなばら すがすが しい緑の山

家々のたちならぶ町々、村々、

古き国々、新らしき国々。

仏の国土ならざるはない。

世々、代々、ひらけゆく世界。み仏のみ国ならざるはな

十方、 三世のかぎりなきみ国。み仏のみ国ならざるはな

これらのかぎりのないみくにが、

こと、それがみ仏の悲願である。

若人よ。

あなたの住むところ。

こころのすみか、

からだのすみか、

そこを清めたまえ。

みほとけのみくには、遠くにはない。あなたの、その眼

れば、くに淨し」と。 の前にある。世尊は、 いみじくも申された。「こころ淨け つぶら瞳の そのなかに、きよきみく

にはやどる。

和は、絶えざる淨化のはたらきの 争いの歴史が人間の歴史だ。歴史が浄化の歴史にかき替え ろ清からざることによって、争い は、ここに始まる。本来、清淨であるみ国が、人々のここ られなけばならない。絶えざる国土の淨め、これこそ世尊 こころ清まるところに始まる。平和は、手段ではない。平 の大悲願の一つなのだ。 真実の平和、楽土は、そのこころ清まるところにある。 、きづつけられた。その なかにある。世界の平和

世尊のかかげ給う二つのともしびは、悲しきまでの願い

真理のともしびは、かかげられた。なのだ。大悲願なのだ。

清めに清められてゆく

人間の完成。

理想社会の実現。

人類の悲願はみ仏 の悲願であったのだ。

との悲願をこころにもつものは心豊かだ。

(大正大学教授)

守られているもの



高 橋 良 和

と、如何にものんきそうである。 ながら歩いていくかたつむりをみている ながら歩いている。縁側の藤椅子に坐り つムリが歩いている。縁側の藤椅子に坐り

た通して美しく光ったのである。 と通して美しく光ったのである。 を通して美しく光ったのである。 を通して美しく光ったのである。

の態度である。

かんできたのである。

なんなにして、小動物の姿をじーっと眺

を守ろうとする自衛の心があることなのである。

問いといってもほんの棒のはしでおさえれば、こわれるような数をかぶりながら、 角であたりのものに警戒をして、のそりの をりと歩いていくのは、なんといっても警 であって、こんな弱々しい小動物でさえ、 自らを守っている周到さにはおどろくので ある。

と、すーっと角をひっこめて、静かにあた

他の動物たちからの恐怖もうけないとみる

りをおびやかす子供の手もとどかないし、

こんなヤッデの葉の先までは、カタッム

りを見おろしているかのようなかたつむり

自らを守るということは生きている上に は必要なことであるかもしれない。然しそ れよりももっともっと大切なことは、自ら が守られているのであるということの方が 生きていく上には必要なことは生きている上に だろうか。

である。

いのである。

一方の国が、グラマン機をもてば、こちらはそれ以上の飛行機をもたなければ対抗 出来ないのであるから、国防費を更に増額 してより充実した戦斗機や、原子兵器の拡 充を考えるようになるのは、当然のことと 思えるのである。

吾が国の自衛隊だって同じこと、国を守 るためにはもっともっと安心して戦える兵 器をもちたい当事者の気持ちは、わからな

の方がよいに決っている。 守る以上は、安心してまかせられる軍隊

然し守るだけで、それで安心出来るかと は守ることより、むしろ守られている形の 方が安心出来るのではないかしらと思うの である。

いう心の働きがあるのである。 にもあの道は物騒であると思うから、棒ぎ れの一本かももって自分を守って行こうと にいっから、棒ぎ

もって行こうと考える。 そうはいうものの相手がもし短刀でもも.

なくてもわかっている。個人の問題でもそうであるから、まして一国と一国の防備はいわなくてもわかっている。個人の問題でもそうで

い、いつでも素裸である。
とうした守る心もちを除いてしまって、
なっていないので、自分はなにももっていないので、自分はなにももっていないのでである。

いらない。素裸の心であるから、今度は逆

に人が守ろうとしてくれる。人が守ってく れるということは、自分が自分を守ること よりよほど安心出来るし、その上確実なの ではないだろうか。いつも裸の心でいる。 そこに必ず他からの守りがある。

からの圧迫が出てくる。
仏にすがる心も同じことである。

自分はなにもかも愚かなものであり、人のなかに互していけない人間であると一歩さがるところに、他からひきあげてやろうる。そこに仏から守られている自分という、のである。

ないかしらとつくづく思ってか、また角を やつでの葉の上の弱いカタツムリは、そ やつけの葉の上の弱いカタツムリは、そ

である。(著者中外日報記者)ことを念じつつ私はこんなことを思ったのこの小動物に、やすらかな日々がつづく

二百十四

異常な注意が払われている。又この日は関 は毎年台風期に 十日目を二百二 東大震災の日で て、祖先への感謝といった姿が感じられま が出来ないもの、忘れた頃に来るものであ 活の中で、やはりこの時期の季節感は大き 処できることも思いだしたいものである。 開花期に当るの 内にふかく省みる心がしみじみと湧き起っ な意味をもっているようです。 っても、「心の にせよ、楽しかったにせよ、自らそこには みのりを収めて行くだけに、苦しかった 二百十日もことなく過ぎれば、私達の生 立春から二百十日目を二百十日、二百二 十日といいます。此の時期 ねじ」をまくことで之に対 当り早稲の結実期と晩稲 もある。天災が避けること で農民の厄日として昔から

て、ひとしお深くそれが感じられます。二百十日、二十日もことなく過ぎれば暑

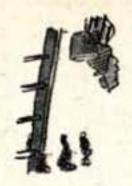
たちに、早速伝道が行われたのである。

孫右衛門の触れで集りきた老若男女の里人

里人は、目の前に、名代の法然上人を仰ぎ

仕事するにも

無 阿弥陀仏



村 F

博

了

り砂浜となっている船着場油ぶが浜に、安着 い荒磯であった。 るうちに、うまい工合に、この浦で三十間計 しているが。その当時は現在に比較にならな 無事に着船が出来ればよいがと心配してい

ら小肥の老僧が二三の従者をつれて上ってき たのである。 「あーよかった」と近づいて行くと、船か ていた。いつもよく見える前面の淡路島も波

したのであった。

その日は珍らしい西北風の季節風が吹き狂っ

時は建永二年の晩冬、所は紀州加太の浦、

しぶきの中に消えていたのである。

村長の阿闍梨孫右衛門は、見まわりに出た

のであった。

沖に小船一般、

猛風にもまれて難航中であ

と、知らされたのであった。 お伴の一人が走りよって「法然上人」です

んで我が家へと案内したのであった。 「法然さま」かと只「はいはい」と喜びいさ 孫右衛門は、音にきくこのお方が名高い

> る、お念仏の功徳をきいて、いづれもニコニ 直接そのお口から、暗夜の灯のように、信仰 出来たのであった。 コと生き甲斐をその生活の中に見出すことが の大切であること殊に阿弥陀如来の本願であ

えられている。 れている。現在報恩講寺什宝として右の品々 とも考えられ、 自像を刻され又百万遍の念珠を造って与えら ことが、寺の起源と見られぬこともない。 の外に、この時の状況が六図の絵伝として伝 の御遺徳をしのんで、相集い講を結んでいた 法然上人は里人とお別れに当って、桜木で 寺名の伝えるよう報恩講の寺 里人達が、円光大師法然上人

ちにその地が れている。極楽の相となったので、これから 我が大師が、 「瑠璃宝池」となったと伝えら 油ぶが浜に上陸されると、

の根本は海水に洗われ、海岸沿に岩焦が散在 現在でも海岸には老松が一列に並んで、そ った。

つたが、とうとう海辺にふきよせられて仕舞

報恩講寺と云われるに至っている。

ついで孫古衛門宅の近くに草庵が結ばれ、

られて現在にいたっている。 油ぶが浜は「るりが浜」と改称されたと信ぜ

御詠歌は

極楽はかくやあらまし

あらたのし はやまるらばや

なむあみだぶつ

と云う。

塩飽笠島の専称寺と同ようであるが、海上 を漕ぐ時も亦南無阿弥陀仏と云う、又海上に船 とる時には南無阿弥陀仏と云う、又海上に船 とる時には南無阿弥陀仏と云う、又海上に船 を漕ぐ時も亦南無阿弥陀仏と云う、又海上に船

下さい」と祈願する。不漁つづきの時には、寺にきて、法然上人

大漁のときも亦参詣しては

「南無阿弥陀仏おかげさまで有難うござい

と、念仏によってその喜びを表現する。寺は

がしいと云う話でした。

法悦

建永二年三月十七日のことであった。播州高砂浦には、時ならぬ群集が出入の船を指しては、ざわめいていたのである。間もなく大型の川船が静かに這入ってきた。客室の戸が型の川船が静かに這入ってきた。客室の戸が三名見えるところを見ると、人々が待っていた、目あての人、法然上人の乗船であったことは、想像されるところである。

-

であった。

船は所定の位置に泊り綱を結んで泊ったの

法然上人の伝道は、人々に対して、静かに である八田治部大夫夫妻もいたのである。こ である八田治部大夫夫妻もいたのである。こ のことについて、勅修御伝には、 人おほく結縁 もいたのである。こ

りの老女、夫婦なりけるが申けるは、わが身は、この浦のあま人なり。おさなくよりすなどり(漁業)を業とし、あしたゆふべに、いろくず(魚)の命をたちて、世をわたる(職業)はかりごととす。ものの命をたる(職業)はかりごととす。ものの命をたく待るなるに、いかがしてこれをまぬかれけるべき、たすけさせ給へとて、手をあれせて泣きけり。

と伝えている。 を見出し、はりのある生活が出来ようかとし を見出し、はりのある生活が出来ようかとし ている。このことは現代も同ようである。 これに対して、法然上人は、

さむね、ねんどろにをしへ給云云れば、仏の悲願に乗じて、浄土に往生すべからごとく成ものも、南無阿弥陀仏と唱ふ

としている。而して帰える時には、

彼らの行為に見よう。と、両人の満足の有さまを伝えている。さてと、両人の満足の有さまを伝えている。さて

上人の仰を、うけたまはりて後は、ひるは はいてて、手にすなどりすることやまざ にかへりて、二人ともに声をあげて、終夜 にかへりて、二人ともに声をあげて、終夜 なりけり。

である。と云う状態であった。念仏しながな仕事をす

ただの一度であった法然上人、而もその教化 も只の一度であって、八田夫妻のような篤信 をく頭が自然にさがり、又自然に念仏が口を 全く頭が自然にさがり、又自然に念仏が口を

難であったろう。その彼らに対し、よく理解 毎日船によって体を張って命がけで暮したで 毎日船によって体を張って命がけで暮したで

> 性られるよう、念仏の功徳を平易に示された ならぬ苦心があったろうと考える時には、法 然上人の偉大なる感化に、しみじみとした有 然主人の偉大なる感化に、しみじみとした有

法 然 松

_

それは承元元年、

我が大師七十五才の時の

暫く御逗留になったのである。勅修御伝には、寺に移られることとなった時に、押辺の浜に大師は四国讃岐から摂津現在の大阪府勝尾

しばし逗留したまふ。
上人(大師)、勅免にあづかり給て、国をい

を伝えられている。その間に於ては、 と伝えられている。その間に於ては、

たれたのであった。

を求める人々も尠くはなかった。 国各地への滝として人々の出入も多く、数化 関格地への滝として人々の出入も多く、数化

び漁夫がいた。彼は大師の化導によって、押 たのであった。 たのであった。

大師は大変気軽に松右衛門の草庵を訪われた。いろいろの物語りの末に、草庵に阿弥陀 もと寺号をつけられたのである。 このことは元禄九年に増上寺録所に提出された同寺の由緒書に伝えられるところではある。

号を賜ったのである。
を賜ったのである。
を賜ったのである。
を賜ったのである。

った。

然にほほ笑まれる。と名付けられたこととを、かえり見る時、自と名付けられたこととを、かえり見る時、自

が浜の漁夫であった。
が浜の漁夫であった。
松右衛門は押辺の脇

風雨の時も、ろをたよりとして海上に出て

体を張って魚をとっては、生活していたので

ある。

浜に松樹を殖えられたことは、風光の点か

った。 心のどこかに不本意とするところが尠くなか 併し無心の魚を捕えては売りさばくことは

「これでよいのかしら」

しばしばであった。 魚のことを考えては、夜もねむれないことが いく度か、まよいに迷ったことや、無心の 浜の阿弥陀寺の御詠歌が、

亡しとして草庵を造り、念仏者となったので 身心共に明るい生活となり、今までの暗い罪 あった。 はからずも法然上人の教誡をうけてからは

村の法泉寺法円上人について出家、法入房と る。又その時の大師の真筆名号と称するもの 称している。 も伝承されている。松右衛門は後に隣村原田 大師から与えられたと云われる鉦を伝えてい 現在の阿弥陀寺には、その時に松右衛門に

がりの記念として三本の松を殖えられたので 大師上人は、松右衛門の草庵に、上人おさ んだん沿岸各地にも移殖され、須鷹、明石の

あった。

り切れないことから無限数の代表と見ること 有利である。殊に三本としたことは、三は割 懐とみることが出来る。かくみる時に、脇ケ の慈光は永遠であり、念仏は又諸仏出世の本 ら見た時にも、漁獲の点から見た時にも大変 と云うことから、三本の松を見る時は、弥陀 が出来る。松の木を「松のみ残る弥陀の本石」

みほとけの まさごの数の 脇が浜とて ばさつまします 右左り

情操教育は、自然に明るい張りのあるものと 俗的にこれを見る時には、海岸と松は、人生 る。 なげやりの漁夫の生活に、松を通して与える にプラスするところ大いなるものがある。 と云う、功徳荘厳を考えることが出来る。世 したことは、大師の深い心況の一端をもの語 常に体を張って、船板一枚下は地獄とする

松は法然松と呼ばれて万人に親しまれ、だ

世界的風光へのもといとなったのである。

月

候一 いっ やはり何れの人の心にも、もの想わるるの 月のもつ陰翳から、太陽の如く雄大なそし 季を通じて好んで詠まれている。女性的な 詩に歌に俳句に、その主な題材として、四 皎々とさえわたる仲秋の名月等、月は古来 れる程寒々とした光をなげる冬の月、清く て豪快なニュアンスは求め得べくもなく、 つつ眺める真夏の月、大気も凍るかと思わ 語に尽される春の月、炎暑を涼み台に癒し 輝く太陽の男性的なのに対して、朧月の一 月かげの美しい秋になった。嚇変として 秋の月ほどあわれに趣きあるものはな

月かげのいたらぬさとはなけれどもなが むる人の心にぞすむ

ある。 まわすの心を」 界を照して、念仏の衆生を摂取して捨てた の歌は、法然上人が「光明は遍く十方の世 という題で詠まれた御歌で

中村代的

真野江頂

中村さんは鑽仰会の創立に当って、大へん力を注いで下さった大切な会の柱石ででに大分すぎていられましたが、お若い時の自由に、多方面にのびのびと生きていられまして、それがまた、かならしい屈托のない自然的性格を具えていられまして、それがまた、かえって後に、られまして、それがまた、かえって後に、られまして、それがまた、かえって後に、分替格をなしていたようです。

華手で、清水市の経済的中心である鈴与商会に入られました。その信仰活動はかなり開眼され、その歿後は転じて椎尾師の共生開眼され、その歿後は転じて椎尾師の共生

ったのは、誠に残念なことでした。鑚仰会

にはかえって悪用されるようになってしま

店を枢軸として、ひろく目ざましい活躍を

のち、東京に出て、こられて、宗務に入り、教学部長を担当されました。よく、その胸を聞いて、学者や有識者の意見をとり 入れ、いわば宗門の明るい「開いた窓」の ような役目をされていました。特に布教方 面に力をそそがれ、宗門の布数がもつと統 一的に動かねばならぬと主張して、全国の宗 信を指導し成績が大いにあがりました。こ の指導方法は、氏がやめられた後までも継

ました。の創立に力を注がれたのもこの時代であり

鑚仰会は、当時、わが国を風靡していた外来文化が行きつまり、人心が深く東洋の内面に向って来た。その風潮を機会としてわが民族の真の精神的基盤をなしている法と人の思想と信仰とを、極めて大胆にかった。私共の口から申すと妙にひびきますが、その企画の大さと新しさ、その強靱な積極的意態と特にそれが宗門の有志者群の純粋的意態と特にそれが宗門の有志者群の純粋な犠牲的奉仕事業であって全くそれに終始した事は、宗門にとって前例のない破天荒した事は、宗門にとって前例のない破天荒な事業でした。

中村氏は、これに対し、真先きに共鳴され、会の中心に参じて活動されました。会 としても、その創立に当って中村氏が宗務 におられたことが、どれだけ各部面にわた って便宜だったか知れません。その頃、ま たその軽妙な筆を馳って、「信仰読本」を たか、キれだけ明く一般にうけ入れられる とし、浄土宗ばなれした間口の広いものでし

現代生活に滲みこんでくるのです。この方 筆にかかるとたちまち軽快な趣を帯びて、 どれだけ功績があったか知れません。今ま 土」の誌価を高 作を試みられ 重ね文名も一時にのぼり、 かったので、非常な好評を博し、版に版を 面では今日でも類例の少ない第一人者とい 上に毎月「法語解説」や「信仰相談」 で、何かむづかしい 人の人格と信仰を一般に理解せしめるの って、さしつかえありません いづれも非常な好評を博し、 るようになりました。浄 めたばかりでなく、法然上 「古典の言葉」も、氏の これから続々著 を執 上誌

ました。よく地方などに、会員拡張に から引更け、病人の私に後顧のうれいのな けてくれましたが、同行の私がじきに たって終始一貫して労苦をおしまず尽され れていたのでした。それで間もなく倒れ をあげましたが、あとから考へれば、 くたになるのに、 しまいましたが、同氏は、その後事を正 なたは疲れることを知らないのだ。」と悲鳴 鑽仰会には、その宣布と経営の両面 私の方は体の内部をすつかり病 いつもタフな同氏に 10 蝕 その 出 にわ < 「あ か 7

> した。 惑をおかけしたことと今でも済まなく思っ 詳 努めつつ、間もなく事件を解決してくれ 村氏は極力それを、 が、その時、 ております。 ているわけですが、 面白くない事件が起ったらしい いように、 細をろくろく知らずに今日まで、すごし そんなわけで、私は到頭その事件 奮闘して呉れまし 急な混乱と同時に会の内部に 私に知らせない 中村氏には、非常な送 た。 のです。 ように ところ 0 中

全く手がかりがなくなってしまふのです。 す。鑽仰会は、その始めは宗門の寺院なぞ 名簿をことでとく焼いてしまったからで 急にとりかえしのつかぬ壊滅的 上っておりましたのでその名簿を失うと、 を通じて、拡大して行きましたが、しまい 兵火をあびて一夜にして灰燼に帰し 君なども入り、順調にますます発展し それに、急迫した戦時状勢は、 てしまいました。というのは、その時会員 きましたが、遂に大戦が始り、事務所は、 0 には会員は、寺院を越えて伸び、 凡ゆる社会層の中に入ってぼう大な数に しかし、幸い、 会の方は、その後、 も早や創立 状態に陥 日本全国 会は 村瀬 て行 2

> の頃、 力その再興にのり出されました。しかし、 当時のように大規模な広告を出して、会員 け、故藤田寛雅 しましたので、中村氏に代りそれを引きう 目鼻がついて来た頃、私も少し健康を回復 拾い上げるよう 熄々たる疲労状態でありまして、頼りにな も早や、会には力なく、全国の寺院も気息 れましたが、これを見て、奮然として、独 俄かに木から落 に呼びかけることを許しませんから、会は たちの協力を求 少しづつ浄土をもり上げ、その再興に努力 るものは何一つありません。それで本当 ぬ状態に陥 されました。幸 地に散った米粒を、一粒一粒爪の先で 中村氏は増上寺の執事長をしておら って 君、や竹中信常君等若い人 な根気と忍耐とを重ねて、 いその後、ようやくそれも めて、再出発に進みまし しまいました。ところがそ ちた猿のような手も足も出

他ぶのですが、氏はその後増上寺を退かれ、順調な発展を示し、ついに今日の盛況 を見るに至った事は、まことに同慶にたえ を見るに至った事は、まことに同慶にたえ



地上寺執事長時代

それを見るのを、

楽しみにしておりました

ふうに大成せられるか。

えられた後には、その天

たのちも、こうして更

遂に見ることが出来なかったのは、ま

ことに残念なこと

であります。

成の風格がどんな

干薬に隠棲され

年輪の数を加

ありし日の

中村先生



教学部長時代



晩年 専念寺にて

なりました。

がちになり、久し

い内にとうとう、

悲しい訃報をきくことに

く御目にかかる機会もな

したので、つい御無沙汰

ない様子でありま

おいうわけか、

余り人々との交通を好まれ

津に隠棲されました。ど

たのち千葉県木更

ました。 も或はあったか け、信仰の方に入 て、物事に理解が に何等の功利的 動の末端につい にも恵まれた全く い純粋な感激的性 もうなづく事でし で止まることが無 な性格を豊かにそ つしぐらに、みご 中村さんは、 な て 得易からざる人物であり 広く、表現の自由な才能 ょう。また、それでい 格であったことは、誰し 打算となく、かけ引もな 知れませんが、その心中 は、かれこれこれ言う人 かったようです。その行 とな前進を示され、進ん っても、傍目もふらずま なえられた方で、それだ く純真な、自然児のよう

中村さんの思い出

里 見 達 雄

私が中村さんに始めて御目にかかったのは、師が宗会議員に静岡教区から当選された直後の大正十四年の一月の末か、二月の始めであったと思う。樹下信雄さん等と一緒に野上運外僧正を静岡の宝台院に御訪したに会わせる為師を招いておいて下さったのである、席上当時の宗情についていろいろな話がでた。

学の面については師と真野さんとの間にお 時期に当っていて、宗門は相当動揺してい た、それに私共も若かったので宗門の現在 た、それに私共も若かったので宗門の現在 を り合った。特に教

の第一線にも立たれていたので質問も適切

む憶する、このとき師から受けた感じは硬 かった。

中村さんの宗会における処女質問は(大 正四年三月)布教々化の問題であって、執 川任達師からそれぞれ答辨があったが、三 小ら師は五期二十年間宗会議員をつとめら れたが、教学部長として柴田玄鳳さんの後 を襲われるまで宗会毎に教学問題を提げて を襲われるまで宗会毎に教学問題を提げて を襲われるまで宗会毎に教学問題を提げて がら師は五期二十年間宗会議員をつとめら がら師は五期二十年間宗会議員をつとめら がら師は五期二十年間宗会議員をつとめら が明会や、土屋観堂師の真生運動や、椎尾

誠実の人

一弁 康 先 生—

放送「法句経講義 と、何かわがままをいってみたい気持にな 宗門高等政策を説き来り説き去り、かんで た。 ったのも、 た。それから以後 分いかめしく、 私は何かお叱りを頂く生徒のように、ずい りされた時は、 もった。 政の諸問題並に動向を詳しく教えて下さっ することになっ にいい知れぬ親しみを感じたものであっ って「判ったかネ」と初めて先生がニッコ った。同じその頃、友松円諦先生のラジオ ふくめるように教えて下さった。それが終 いきなり私を応接 であった。私は当 ったのである。 つ御教示を頂いたのは昭和九年四月のこと 中村辨康先生に初めてお目にかかり、且 先生の後に続いて応接間にゆきながら 西も東も判らない新参記者の私に この時 その時先生は教学部長で、 私もホットして、今度は逆 こわい先生といった感じを たので、 に、先生にお目にかかる 」が世間の絶賛をあび に感じた温さのためであ 間につれてゆき、宗門行 時あった教学新聞に勤務 宗務所に挨拶に行

で急所を衝くものがあった、これには歴代の教学部長も相当悩まされたことと思う。 の教学部長も相当悩まされたことと思う。 の拡充を図るべきである」ということが根 をなしていた。

先生は昭和七年九月満期の為退職せられ 生で、師は深く先生に信任せられていたが がれた。先づ教線の分布地図に手を染め、次 平素の主張に基いて布教々化の面に力を注 して在任された。教学部長としての師は、 たが、このとき師は引きつづき教学部長と 教学部長に就任された。執綱は渡辺海旭先 られたのは、 布教師養成機関を設けて、 置き、教化の刷新指導に当らしめると共に で全国に布教管区を設け、 た。後任として野上運外僧正が就任せられ 網時代を通して五年内外であったが、その つとめられた。師が教学部長として在任せ 中村さんは、 前述する如く渡辺、野上両執 柴田玄鳳さんの後を承けて 各管区に監督を 布教師の育成に

> 情勢であって、私共も非常に苦慮した。 体的に述べることは、影響するところも多 力致されて、問題は一応無事に納った。 せられ、事態を円満に収拾されることに努 事の面において、 あろう、なお師の宗務所在任中宗門最高人 この師の努力と貢献は高く評価さるべきで 間鋭意教化の拡充、発展につとめられた。 うべきであろう。 るに師はよく執綱を輔けて、その間に善処 いので差しひかえるが、一歩その処置をあ のことなどは師の蔭れた功績の一つともい やまると一宗全体の混乱ともなり兼ねない 二三の問題があった。具 2 然

展の諮問機関)の委員として、漁畜を傾けられ、清水に帰られたが、依然宗会議員として、宗会に議席をもっておられた。然した立たれず、宗会でも議場では、余り第一線に立たれず、宗会の長老として、自ら重きたなしておられたように思う。その後昭和十九年大本山増上寺の執事長に就任せられた。古いておられたは、審議院(教学に関する管長の諮問機関)の委員として、漁畜を傾ける管

た。私たちはこの気運を「仏教ルネサンス」と呼び、一つの流行り言葉となった。本会と呼び、一つの流行り言葉となった。本会はこの気運に乗じて逸速く結成されたのである。

しかし 誌上に沢山の原稿を寄せられていながら、 < 11 回答されていた。 上に掲載 た。毎月質問し 連載と同様に数多い固定読者をもってい れていた。この欄は吉田絃二郎先生の随筆 かった。また先生は、信仰相談欄を担当さ 有名書店の店頭に「浄土」と染抜いた黄色 中心にして計画実践され、講演、 ついに一回も原 「浄土」の刊行等潑溂たる活動が開始され 小旗がひらめ 編 先生の原稿は、 申すまでもなく、本会は真野正 集部に届 割愛した質問に対して先生は私信で しきれないで困ったものである。 けられた。あれだけ「浄土」 いたのもこの時であった。 稿の督促を受けたことがな てくる投稿は、とうてい誌 いつもグ切日より数日早 順博士を 図書出版

れが判る。昭和十六年のこと、京都市で教刊行された「信仰相談」は初版二千部をた明行された「信仰相談」は初版二千部をたい。

られたり、管長代理として北支に赴かれた 起され、雑誌「浄土」を創刊せられるなど れることであろう。 輝かしい業蹟の数々は、 真野さんと共に「法然上人鑽仰会」を 今後も長く讃えら

上寺執事長を辞められるまでの二十余年間 であって、特に宗務所御在職の五年間は、 のは、始めて御目にかかったときから、増 私が中村さんと親しく御つきあいをした

最も感じたことは師に宗政家 中村さんをなつかしく思うが、最早この世 にたづさわっていると型ができるものだが 相談もし御指導をも受けたが、その間私が でも人間としての中村さんであった。その 一としての臭味のなかったことで、 長く宗政

うと思う。 門の前途を見まもっておられることであろ の人でない。師は永く宝蓮台上において宗

同僚として日々顔を合せ、宗務について御

信行道場と弁康上人

伊 藤

宏

天

教に邁進する私の、教学部長中村辨康上人 の一貧寺の住職であり、身を挺して一図布 「近年稀に見る名部長」これが当時片田舎 を評価するようで聊か恐縮でしたが ただ宗報・浄土等其の他の印刷 而も位置の相違は未だ面接の お上手が無かったため、ちよっと近づき難 ためであろう。 13 れは恐らく上人が無口で、ブッキラボウで を、私は今も尚、イカンに思って居る。こ 師等に、無条件で承認されなかったこと 感を与え、威張って居るように思われた

められた。信行道場の件であった。爾来、 私は突如、 辨康上人から面会を求

機も無く、

観であった。

物によるばかりであった。

然し私

のこの

康上人観は関東のT布教師、関西のC布教

られたことを知 時も先生は、座談の方がはるかに優れてお 方では居眠りが やかに、活発な を打ったように た。それでも先生は熱心に本会のもつ意義 間半の演説を行 は本会の趣旨から説きおこして滔々と一時 展のための懇談 区の有力者二十 見交換の座談に移った。すると先刻まで水 を説き続けた。 いた老大家たちはぐっすり?眠ってしまっ 始まり、前方に座を占めて 意見の発表があった。この 静かであったのが、急に賑 やがて先生の話も終り、 った。ところが聞いている を行ったことがある。先生 数名に集って頂き、本会発

方面の先覚者でもあった。 は実践の人であ 力幹部として活躍されたが、要するに先生 声であった。 していたのは、 の他保育園や人 治三十八年に幼 知られ、 戸千家の師範で 先生は多趣味 また先生は光 朝顔や 活 花をよくせられ、茶道は江 明会、真生社、共生会の有 菊造りも御自慢であった。 の方であった。 あった。俳句は撫象の号で 事相談所を開設され、その 稚園を開設された位で、 った。御自坊においても明 観世流謡曲であり、その美 自他共に許

とうした先生 の御風格が、そのまま本会

年々々続開された鎌倉光明寺での同寝同食の道場生活により、辨康上人の指導と無言の感化を施こされた者は、私を初めとしておき伝道者幾百人、宗団の前途を荷なった生活は、私にもそうであったように、上人生活は、私にもそうであったように、上人にも恐らくは得意の時代であったに違いない。

本直に云って上人は自由型であり、我儘 を直に云って上人は自由型であり、我儘 と云った方が妥当だと がい、線の太いおおまかな所と、学識と云 がい、線の太いおおまかな所と、学識と云 がいに若者の心を捕えて居た。

格の強さが偲ばれる。 を活を思い出すと、そこにも辨康上人の人 を活を思い出すと、そこにも辨康上人の人 を活を思い出すと、そこにも辨康上人の人 を活を思い出すと、そこにも辨康上人の人

人の求道初期、共生会によって円熟された上ひたぶるに光明会念仏に打ち込まれた上

信境、そのままを若者達にぶちまけられた 信行道場、とうした上人本来の宗教的面目 能の造詣も深かったように思われるが如何 か。

最後、増上寺執事長時代の上人の全貌は 私の深く知るところで無いが、在職中、本 山会議に出席されて「増上寺は知恩院の家 来では無い」とタンカを切って席を立たれ たと云うことは余りにも有名である。今日 たと云うことは余りにも有名である。今日 した面を察知するに難くないと思う。

比して余りにも淋しい姿であった。 葉に隠遁せられて悠々自適、殆んど社会と 葉に隠遁せられて居たことは、その盛年と といて余りにも淋しい姿であった。

を謝しつつ思い出を綴って浄土に送る。中すべく日程したのが、前夜突然に法務を申すべく日程したのが、前夜突然に法務を申すべく日程したのが、前夜突然に法務をある。

やお 戦当時の難局を切り抜けられ、昭和二十五回目 大本山増上寺執事長を三期勤められ、終れた の育成発展に役立ったわけである。

年五月に病のた

めに辞職されて以来は、

更津専念寺で療養されていた。

とがあった。

事念寺をたずねて山門に立つと、すぐ本 生があり、折から先生は本堂のまん中でこ 生があり、折から先生は本堂のまん中でこ を修理されていた。子供用の長机で恐らく を修理されていた。子供用の長机で恐らく で修繕されていたのであろう。

混って、 まれ、 先生は前執 であった。 から独り離 宴会場には行 らは人々が一 招かれていた。 落慶法要が厳修された。その日は天候に恵 も背広姿で前職 昭和二 幾多の名 一十九年 事長 内 九 度に退出してきた。その中に か 立っておられた姿は印象的 者とはいい条、雑踏の人々 見渡しておられた。珍しく ず、本堂の左隅に立ち、 本堂から出てきて、すぐに やがて儀式が終り、本堂か 士が雲集し盛大を極めた。 の肩書で、もちろん盛儀に 十月十五日に増上寺本堂の

(村瀬秀雄



釈尊の生涯一

ないといった状態が、 の掃除をしないし、また、 的階級制度である。 発展を阻害しているものは、百数十種にわけられた、 のような階級制度の根源をなしたものは、 でに成立していた、 1 仕事の仕方も、 ンド・アーリアンの文化史 靴直しの子は、 テーブルの上を掃除する家夫は、 いわゆる四姓 今日のインド人の生き方である。と 床を清める掃除婦は、 現在、インドの近代的な の階級であった。 靴直し以外にはなれな 釈尊の時代にす 洗濯を 床上 職業 ある。

階級で、これは農工商に従事する、一般階級である。最後級である。第二は刹帝利(クシャトリヤ)で、これは、政み、解釈して、宗教行事と思想文化を支配する、第一の階級である。第二は刹帝利(クシャトリヤ)で、これは、政治や軍事をおこなう軍人と政治家であって、釈尊の釈迦族はこの階級の聖典といわれる、吠陀(ベーダ)の経文を読いる。とれば、政政のというのは、第一に婆羅門(バラモン)階級で、こ四姓というのは、第一に婆羅門(バラモン)階級で、これは、政

の第四は首陀(シュードラ)といって、これは奴隷階級で佐 藤 密 雄

民は、 なり、 が、 服された土着民が、奴隷階級の首陀 アーリヤ人となった。このインドに入ったアーリヤ人に征 とになったのである。バラモンが、 禁ぜられて、血統 よると、 階級によって形ちづくられ、第一階級のバラモンの説明に である。アーリヤ人の祖先は、ア の血統を乱すような、結婚およびその他の交渉は、厳重に どうして奴隷階級が発生したかというと、インドの文化 このようにして、 一部は西方に移動して、今日 今日のヨーロッパ人と同じ祖先をもつ、アーリヤ人 一部は南下して、ペルシャ、 これは民族の発生以来、 の純潔を誇ることが、 インド・アーリヤンの社会は、四つの 定められたもので、 のヨーロッパ人の祖先と ジア大陸の中心にいた (シュードラ) である。 第一の階級としての権 インドの文化を築いた 極度に尊ばれるこ 四姓

ある。 7 世 代の文化の中心地は、クシャトリヤ階級が卒先して発展さ 要であることが認識せられるようになり、さらに、釈尊時 リヤ階級の武力や、ペイシャ階級の金力が、專実として重 服や、経済的な発展に、パラモンの神力よりも、クシャト て、その重要さを根拠づけるための、いろいろな哲学的な なかにあっても、 的な勝利や、 力をもったのは、古代社会のことであり、おおきくは軍事 には、すでに一千年の思想の歴史をもつに至っていたので 理論を論じた。これが積みかさなって、釈尊にいたるまで れた社会であったからである。しかし、そのような社会の いたるまで、宗教上の祈禱や、呪力で決定されると信じら も、バラモンの思想家と同じように、尊敬するようになっ に対してバラモンの人たちは、祈禱や、呪力の本質につい 階級からおおいに進出するようになり、社会の人たち ところが、釈尊の時代に近づくと、新しい領土の征 のであった。このことが、思想界にも、クシャトリ 政治の発展から、 人間の知識はつねに進歩するから、それ ちいさくは各個人の運命

で思想家となるものは、まず出家して、家庭と一般社会の(軍人、政治家)階級や、ベイシャ(一般人)階級の出身出家沙門の発生 バラモンをのぞいて、 クシャトリヤ

生産活動から脱し、乞食し、衣食をうけて生活し、思索とは、同時に宗教家になることであったが、 釈尊の時代には、同時に宗教家になることであったが、 釈尊の時代には、日家して宗教家になることであったが、 釈尊の時代になることであった。

釈尊が、仏教教国を設立してのちのことであるが、当時の文化の中心地である王舎城には、青年たちが出家して仏の文化の中心地である王舎城には、青年たちが出家して仏の文化の中心地である王舎城には、青年たちが出家して仏をとさえある。その当時、出家することは、世を脱れて、ことさえある。その当時、出家することは、世を脱れて、ととさえある。その当時、出家することは、世を脱れて、とも僧伽(サンガ)とも呼んだが、この集団を伽那(ガナ)とも僧伽(サンガ)とも呼んだが、この集団を伽那(ガナ)とも僧伽(サンガ)とも呼んだが、この集団を伽那(ガナ)とも僧伽(サンガ)とも呼んだが、この集団を伽那(ガナ)とも僧伽(サンガ)とも呼んだが、この集団を伽那(ガナ)とも僧伽(サンガ)とも呼んだが、この集団を伽那(ガナ)とも僧伽(サンガ)とも呼んだが、この集団を御那(ガナ)とも僧伽(サンガ)とも呼んだが、この集団を御間して、そわれる指導者となることは、いわば新思想を創唱して、そわれる指導者となることは、いわば新思想を創唱して、そわれる指導者となることは、いわば新思想を創唱して、それを実践する学徒を有する一学派をもつことになるのである。

宗教家の四期に分けられた生活の、第三、第四期に類した出家の方法。出家して乞食生活をすることは、バラモン

あり、 出家を認められたのである。 わって王位をつげる状態にあったような場合には、とくに 業をうけつぐ必要がないと考えられる場合である。あたか 滅することである。しかし、このような生活に入るため ずって出家し、おのれ自身のために家教生活に入ることで には羅睺羅(ラーフラ)という男子が生まれて、釈尊にか 家業をうけつぐことが見込まれて、とくに自分が、父の家 で家業をおこなっており、自分には男子の子供があって、 がいなくても家業がつづけられるようになってからでな 出家には制度があり、子供に完全に家業をゆずって、自分 のいっさいの交渉は断絶して、宗教行儀にひたりつつ、死 生活をすることである。第三期の生活とは、家業を子にゆ と許され 釈尊の父、シュドダーナ王がいまだ健在であり、釈尊 第四期は、さらにすすんで、森林等に入って社会と ない。ただし、これにも例外があって、父が丈夫

かれる。そして、釈尊もまた、時代の傾向に鋭敏な青年であれる。そして、釈尊もまた、時代の傾向に鋭敏な青年である。

ことは、不可能なことであると感 が、明らかに予見される時代に、 そのまえに釈迦族の多数の男女を て、釈迦族は全滅の爱目をみてい 亡くなるとともに、 晩年にちかい頃であったが、釈尊 ばれた英才であったとしても、釈 の難をのがれさせて居られる。こ る、コーサラ国の勢力下に入って られることは、釈迦族の国が衰え てて、無形の精神の世界に向って 出家と釈尊の 釈迦族 のインド支配の悲願 環 境 コーサラ国 釈尊の出家 0 釈尊が青年となり、えら 進められたと思われる。 は、有形の国家政治をす じられたであろう。その 迦族がインドを支配する のような末路になること 、仏教へ出家させて、そ るし、釈尊も、予知して ピルソ王の侵入をうけ の父、シュドダーナ王が いたことである。釈尊の て、すでに新興帝国であ について、いま一つ考え

当時の出家者の社会は、国家から完全に独立した社会でおり、政治、法律、習慣のいずれについても、まったく国家の支配を受けることがなかった。大沙門を指導者とするは家集団では、その集団で規則をつくり、司法行政に相当

団のすべてが、そうであったのである。知られる。これは、仏教にかぎらず、当時の沙門出家の集からの仏教教国は、土地なき独立国家をなしていたことがて、これは今日、仏教に存在する律蔵の規則を見れば、イ

釈迦族の子と名乗るのである。 国を見るとき、これを証明するいくたの事実がある。まず ば、すべてのものは前姓をすてて、等しく釈子となるとい 教の特色を示す重大なことであるが、ひとたび仏門に入れ 耶輸陀羅 るし、また、釈尊が仏陀となってから五年を経て、養母で め、 第一に、釈迦族滅亡のまえに、釈尊の一子ラーフラをはじ なき釈迦族の王国を建設されたともおもわれるが、仏教教 はなく、 とれはたとえば、きのうまで王であったものも、奴隷であ うことである。釈子とは、釈迦族の子ということである。 て、比丘 あった。波閣波提(ハジャハダイ)や、釈尊の妻であった ったものも、出家して仏門に入った今日では、すべて階級 思想上の釈迦国 異母弟から従弟などの一族の青年の多くが出家して 平等であって、その象徴として、全部が一ように 尼教団を作っているのである。第二に、これは (ヤソダラ)をはじめ、 釈尊は出家して、ついに思想界に土地 一族の女子達も出家し 14

このことは、バラモンのように、生れながらの人間に先

釈尊の説かれるおしえを、この

武器の輪に譬えて法輪と

いうことにもなる。 いうことにもなる。 いうことにもなる。 しかし、すべてのものが釈迦族のることを示すのである。 しかし、すべてのものが釈迦族のることを示すのである。 しかし、すべてのものが釈迦族の子と名乗ることは、仏教教国が、生活の秩序の根本としていることを示すのである。 とうとするのに対して、仏教で天的な階級を認め、その人の努力に関係なく、不平等な差

王国は仏教とともに存続しているともいえるのである。でも、死後、法名を付せられるのは、俗姓をすてて、釈子のは、釈子としての法号をつけられるし、そうでないもの今日の日本の仏教徒といえども、仏教の帰教式に出たも

王には、 転輪聖王に、釈尊を比較して定め 転法輪というが、 の)をもっているが、 の王は、金や、銀や、 の大王に比して、法王とみる傾向 転法輪王の思想 敵を全滅させることのできる 金輪王や、 これは、インド 銀輪王や、鉄 さらに第三に これは邪悪. 鉄でつくっ という武器である。 な敵がきたときに投げる 輪王があって、それぞれ られたのである。転輪聖 の理想的な大王とされる がつよい。釈尊の説教を た輪(車輪のごときも 仏教では釈尊を思想界

し、ひとたびおしえが説かれると、邪教のすべてが破せられるという。これには、まさしく釈尊を転輪聖王に比較して、転法輪王とみる考えがあったのであろう。もっとも、ち、釈尊をこの王に比較することも、後世の考えであるとされるが、しかし、そのような釈尊を王とみる考えかが成立すると、それに呼応して、釈尊を転法輪王とすることが成立すると、それに呼応して、釈尊を転法輪王とすることがは立すると、それに呼応して、釈尊を転法輪王とすることがは立すると、それに呼応して、釈尊を転法輪王とすることがは立すると、それに呼応して、釈尊を転法輪王とすることがは立すると、それに呼応して、釈尊を転法輪王とすることがは立すると、それに呼応して、釈尊を転法輪王とする考えが成立すると、それに呼応して、釈尊を転法輪王とするととがは、釈尊の出生を、大王の太子と見ることになったと考え

られるが、釈尊の入滅のときも、その葬送は、王者を葬る仕方でなされたと伝えられる。しかしながら、時代はいまから二十五世紀も古代にさかのぼり、しかもインドのことが、判然としていないので、王者に対する礼をつくすことが、判然としていないので、王者に対する礼をつくすことが、尊教の唯一最大の表現でもあった。釈尊が、思想界の王として尊敬されたことについても、このような点も考慮されねばならないと思う。

(大正大学教授)

仏教ものしり帖

福荷と茶吉尼天 梵語でダーキニといい、元来は仏教以外の古代インドの宗教が前に人の死を知り、人糞を食物とするとい前に人の死を知り、人糞を食物とするというれた。

信仰を弘めるために、仏がこれを説いたとた。真言宗では、仏教でも、一般の人々にた。真言宗では、仏教でも、一般の人々にた。真言宗では、仏教でも、一般の人々にた。真言宗では、仏教でも、その神通力を

河の豊川稲荷、伏見の伏見稲荷等、各地に が、日本では東寺(奈良)三井寺、山門と が、日本では東寺(奈良)三井寺、山門と 山に祭って、「稲荷権現」といった。後 一世、茶吉尼天は俗に「稲荷」と呼ばれ、三 世、茶吉尼天は俗に「稲荷」と呼ばれ、 三井寺、山門と

ところから、狐を使い神として、自らも狐れ、その像が白狐に跨っている。茶吉尼天 と、茶吉尼梅陀利経に白辰狐王菩薩と書かれ、その像が白狐に跨っている姿であったと、
なった
な

地に や願かけにも用いられる。 と考えらない の精(こころ)を本体とするものと考えらない の精(こころ)を本体とするものと考えらない。

持っている。普通は字の掛軸である。 に人足を持って、口を開いてまさに食わん に人足を持って、口を開いてまさに食わん をし、左手に人手を持っている。前方の左 をして、右手の強鬼の形をして、右手

ょ り

は など明かに文章の寄せ集 ずか 0 坊さん以外あまり読まな 努力不足を示す。 わかるかどうか考えてやって頂きたい 徒によませるのでしたら、 0 は此 地 又長い文中の見出し L 12 から見て七月号は五十五点なり。 は各宗中大変よい方ですが七月号 の点仲々よく出来ている浄土の本 盆風物詩」 集発行御苦労さんです。 の結果」 中山 書房 がな 四雲偈」などその め編集で、 「入寂の地」 la. 檀信徒 0 60 読者より 第 のは編集者 仏教 題名が から これで 仏 0

月号も 度満拾 した。 送り 号より浄土 しく拝見致 も見 か ますの。 りで御 せたいと思いまして全部 御送 今月は又特集記事も御の 年 げます。何とぞ御受納下さい K を拝見致し 恥 り頂きまして有 しました。 拾ケ年拝読の記念に誠 しう御座いますが、 なりました。 て居まし 昭和弐十四年 がとう 62 つか若 しまっ せ下され て今月 金千円 K 42 0 座 者 少 7

> 北 熊 長 大 神 群 賀 海 奈 野 本 111

> > 山

辨

成

賀

佐

東

京

大 井 埱 義 伸

小林 多次郎

昭

和

+

Ξ

植

渡辺 みさお

岸

村 松

定価

五十円

田 根 信 弁 子

西村 沙代子

発

行

佐

藤

密

堆

中

信

常

Ш

111 英 夫

山

干

(以上七名東京常光寺大谷隆雄師紹介) 西 村 昭

中

諦

無阿弥陀仏

北 海

桑原干代

規 員 紹

部馬 平 院

様

11

大 運 11

土

九月号

昭和三十四年 昭和三十四年 年 五 九月一日 八 月廿五日 印刷 物即可 月廿日 発行

神 神谷印刷株式会社 谷 秀 雄

田

刷

所

印

刷

法然上人鑽仰会 振替東京八二一八七番

東京都品川区上大崎一ノ七八二

行

所

土 購 読 規

定

部

定価

金五十円

(送料

四円)

金六〇〇円 (送料不要)

会費一力年

The testimonial from the governor of Kyoto awarded to U. NAKAMURA. the director



The letter of gratitude from the Mayor of kyoto sent to NAKAMURA FUNGUS CHEM. LAB.

中 贈入必

世界に発表さる 界に報告の の卓効力を刷 文に英訳さ

中村医学にて難腐の治る真理

中村医学の基礎

中村医学の学理









(=)

(-)

恐るべき耐性菌を崩壊淘汰する

滲透するバクテリア層を完全淘汰する

実 実 験 話 報 例 (1) (t) (174) (4) (H) (=)

好転恢復

胃潰

瘍で食事

も出来ず手

術

を

(14)

る病原と副作

用の滲害を解

て百%全

治し

た報告。

喘息で注射す

るほど発作

7

腎臓、 関節リユウマ ぬ状態から て楽に歩行 糖尿病 不能の できる報告。 チ並に神 で入院すれど全治 転全快 難 症 経 0 報 痛 が 告。 好 C

雑誌名を御

た報告

京都市東山区鞘町五条南 電話紙園(6)2364 • 0522番

好転恢復

を好転恢復. 解淘汰 る報告。 肝臓を腫らし 心臓病特に 転恢復され 高血圧で脳溢 肺結核を治 ている報告。 の進行 の副作用 危 を好 道 胆嚢を痛 中 険 6) 血 止 K 癌を恢復 11 な狭心症 る報告。 の危険状態を好 る報告。 癌 て恢復 8 細胞を溶 た 0 危 危 篤 た

Nakamura Fungus Chemical Lab. Sayamachi Gojo, Higashiyama-ku, Kyoto, Japan

か 册: さ ま 0 童 話

定価二五〇円・〒三〇円 ・ 二四〇頁

◇ママ、 ◇幼稚園・保育園の、三年保育や年少組のお話に、 す。 そんな時に、この本一冊あれば、すぐ話せます。 お困りでありませんか? お話をしてよう……とせがまれませんか? 本書はそれを解決しま

名

仏 教 保 育

定価一八〇円・ ・一十二四円

◇単なる保育と仏教保育とはどう違うか。 保育の特色が如何に大切であるか……これを簡明 加えた、 にまとめ、現今行うべき課程や必要な法規をつけ 仏教保育を行うための最良の手引き書。 この仏教

所 東京都中央区京橋二ノ 山 (塩山 ビル 院

発

振档東京九九三〇 電話京橋 (56) 五四九二四九二四

宗祖七百五十年御忌記念製作

カラー・スライド

円光大師二 五靈場 上·下二巻

荷 定価上・下二 造 送 料 金 金一五〇〇円 九〇円

御注文の節は前金にてお願い致します

電話芝(43)一三八二東京福港区芝公園十九号地浄土宗務所内東京福港区芝公園十九号地浄土宗務所内

申

込

先

惻 17 と人 0 心を打 失明 の話験 武田 泰淳

文学の 世界

宗教の信仰を遺文にみる

からみた無常の

定価三十円・デ八円 A五版·二十七頁

百部以上二二十部以上二 一割引

甦えるいのち

東京都品川区上大崎一の七八二 法 然 振 八二一八七番

発行所

浄 土

第二十五卷

定価金五拾円(照料)

第 九号